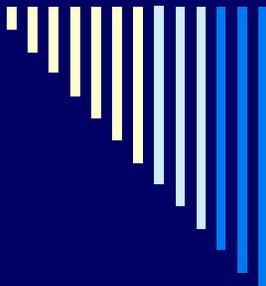


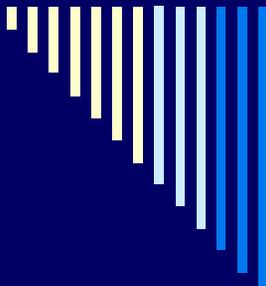
# イラン核疑惑と 欧米の対応

(財)エネルギー経済研究所  
中東研究センター  
坂梨 祥



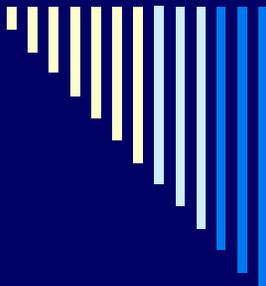
# はじめに： 産油国イラン基礎データ

- OPEC第2位の産油国  
(1位サウジアラビア、2位イラン、3位UAE)
- 原油生産量: 393万b/d(04年)
- 確認埋蔵量: 1.325億バレル(シェア11.1%)
- 可採年数: 88.7年(04年末)
- 日本は原油輸入量の15.0%(62.8万b/d)を  
イランに依存(04年)(UAE、サウジに次ぎ3位)
- イランは総原油輸出量の27.2%を  
日本に輸出(1位:日本、2位:中国、3位:イタリア)



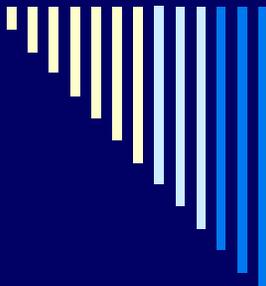
# 報告の内容

- これまでの経緯
  - ・ 年表とまとめ
- 関係各国の思惑
  - ・ 米・EU・ロシア・中国 / イラン
- 問題解決が困難な理由
  - ・ 対立点の整理 / 妥協点の不在
- 最新の展開と今後の展望



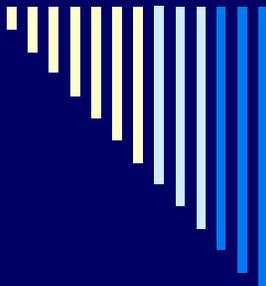
## これまでの経緯

- 2002年8月、反体制組織による「秘密裏の核兵器開発計画」の暴露
- 2002年9月、イラン、平和利用目的の核開発計画を発表。IAEAへの修正申告を約束
- 2003年2月、IAEA査察
- 2003年10月、テヘラン合意
- 2004年11月、パリ合意
- 2005年8月、イラン、ウラン転換作業再開



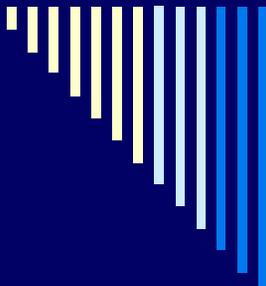
## これまでの経緯のまとめ

- イランが核兵器開発を行っていたか否か: 査察開始より3年近くを経て、未だ未解明
- 米国は自らがイランの脅威の最大の源の一つとなりつつ、「脅威の抑止」力としての核兵器をイランが開発と断定
- 一方イランの側も、平和目的を主張しつつ、(交渉手段の一つとして)相手方を攪乱
- 交渉の文脈は複数存在
  - ・ 「悪の枢軸」イラン vs 「世界の警察」米国 + EU
  - ・ 米国の「ダブル・スタンダード」: インドの例
  - ・ 六カ国協議の事例: 核兵器は「持ったもの勝ち」
  - ・ 核保有国 vs 非核保有国 (不平等なNPT体制)



## 各国の思惑

- **米政府**: 現イラン体制とは国交断絶。イラン・イスラム共和国体制の「転覆」も歓迎
- **EU諸国**: アメリカの不在はEUにとってのチャンス。核交渉もポイントを稼ぐチャンス。しかし、イランの核化は認められない
- **ロシア**: 「濃縮はロシアで」とする新提案。イランにおける影響力の拡大をねらう
- **中国**: イランへのエネルギー依存度を高める。イラン核問題の安保理付託は支持せず



# イランの思惑

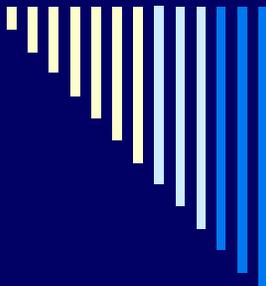
- NPT加盟国としての濃縮権は死守のかまえ
- 世論も「対外強硬姿勢」を支持
- 国(内)外に適度の「危機」を抱えることで、  
(危機に対峙する)体制の基盤は強化

例) イラン・イラク戦争

イスラム共和国体制の定着

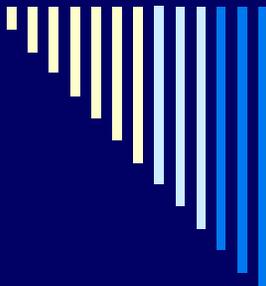
危機の全面解決を必ずしも望まない

例) 度重なる修正申告、査察の拒否、etc.



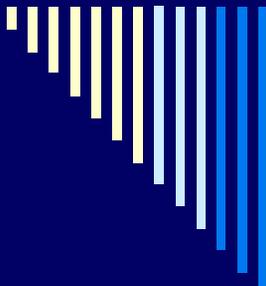
## 対立点の整理

- **米政府の主張**: イランは核エネルギー開発計画を隠れ蓑に、核兵器開発を行っている。
- **EUの主張**: イランは核兵器開発疑惑を晴らすべく、「透明性の確保」に努めるべき。
- **イランの主張**: イランの核開発計画は純粋に平和利用目的のものである。未申告での核関連活動についても、すでに修正申告を済ませている。



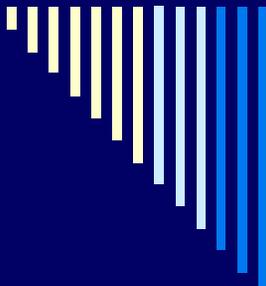
## 「妥協点」の不在

- 核交渉の焦点: イランに濃縮関連活動を認めるか否か
- イランの主張: 平和目的の核エネルギー利用は、NPT加盟国であるイランの不可分の権利
- 米・EU側の主張: しかしNPT加盟国としての義務をイランは不履行。IAEAに対し未申告で行われていた数々の核関連活動は、イランの意図に疑念を生じさせるもの 認められない



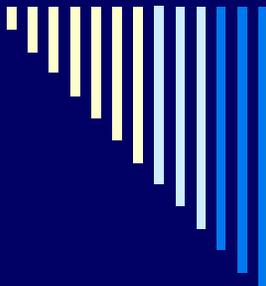
## 最新の展開

- 11月24日、25日IAEA定例理事会開催  
国連安保理付託は見送り・非難決議もなし  
議長声明のみ発表
- 欧米側の事情：ロシア新提案  
(対イラン政策の調整、時間切れ)
- イラン側の反応  
「強硬姿勢」( = 濃縮権の死守)を譲るとの選  
択肢はなし。ウラン転換も事実上承認。 =  
「勝利」



## 今後の展望

- 12月初旬、「ロシア提案」の検討
- 「NPT加盟国の権利」の剥奪は、困難
- 十分な「信頼回復」も、おそらく同様に困難
  
- 同様の駆け引きが今後しばらくは続く
- 次回IAEA定例理事会：3月開催
- それまでに動きがなければイランはナタンズのウラン濃縮を再開？ **危機の再燃**



# おわりに: 核問題が 産油国イランに及ぼす影響

- 核問題解決の展望は見えず
- 長期的にはイランの原油生産能力に悪影響(核問題をめぐり孤立を深めた場合)
- 核問題、現在の国会が持つ「反外資」傾向(資源ナショナリズム)とともに、イランの石油産業にはマイナス
- しかし現イラン体制は自らの掲げる正論と被害者意識に自縄自縛